博士学位論文審査要旨

２０１６年12月26日

論 文 題 目：　悲しみの種類の違いに関する多角的検討
学位申請者：　白井　真理子
審 査 委 員：

主　査：	心理学研究科	教授	鈴木　直人
副　査：	心理学研究科	教授	佐藤　豪
副　査：	心理学研究科	教授	畑　敏道

要　　旨：

これまで単一のネガティブ感情として扱われてきた悲しみ感情の研究を概観すると，喚起場面の多様性や，悲しみと表現される事象であっても主観的感情の変化やその生理的反応に関する知見の不一致など，様々な特徴が示されている。こうした悲しみ感情の複雑な特徴や反応から，種類の異なる悲しみが存在する可能性が考えられる。本論文は，悲しみの種類の違いについて，主観的・生理的側面から多角的に検討した3つの研究からなる。

研究1では，悲しみ感情を喚起する場面を明らかにすることを目的とし，予備調査で収集した36個の悲しみ喚起場面を多次元尺度構成法により分析した。その結果，悲しみの喚起場面は“対自己―対他者”と“対処可能―対処不可能”の2次元で説明できること，また喚起場面は，“死別・喪失”，“恋愛における別離”，“孤独・一人ぼっち”，“家族の不和”，“自己目標達成の失敗”，“自己の怪我・病気”の6つのクラスターに分類されることがわかった。

研究2では，悲しみの評定尺度（“涙”因子，“胸の痛み”因子，“無力感”因子の3因子）を作成し，6種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴を，時間的経過を考慮し検討した。その結果，死別・怪我・孤独場面により喚起された悲しみは，3因子の評定が高く，1週間後でも同程度の値を持続し，失敗・恋愛・家族場面において喚起された悲しみは時間的経過に伴って低下を示すなどの心理的反応の違いが見られ，同じ悲しみという感情で表現される状態であっても，主観的側面においては異なるものである可能性が示唆された。

研究3では，主観的側面において顕著な特徴の違いを示した“死別”場面と“失敗”場面による悲しみに付随する生理反応及び主観反応の変化を検討した。その結果，どちらの悲しみ喚起も課題前半は交感神経系の亢進，後半は副交感神経系の亢進が示され，死別のイメージ課題中のみ拡張期血圧の上昇が見られ，覚醒度の亢進を示した。主観反応変化に関しては，失敗条件では，嫌悪や怒りの評定値が死別条件よりも高く，涙評定値が低かった。

以上一連の研究結果より，少なくとも2種類の異なる悲しみの存在が示唆された。一つは，主観的側面において悲しみの特徴がしばらく持続したのちに減少し，覚醒度の亢進を表す生理反応を示す“存在するものを失う”ことに関する悲しみ(例えば死別)である。もう一つは，失敗といった“手に入らない”ことに関する悲しみで，時間とともに特徴が減少し，嫌悪や怒りが含まれる主観的反応を示し，生理的側面においては，特異的な変化が認められない悲しみ感情である。

本論文は，悲しみの種類の違いに関して主観的側面および生理的側面から多角的に検討した結果，従来一つの感情として捉えられてきた悲しみには，少なくとも2種類の異なる悲しみが存在すると結論したものである。本論文は悲しみの種類の違いに関する最初の実証的報告であり，感情という未だ十分に解明されていない分野に新しい知見を提供するものである。従って本論文は，博士（心理学）（同志社大学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１６年12月26日

論 文 題 目：　悲しみの種類の違いに関する多角的検討
学位申請者：　白井　真理子
審 査 委 員：

主　査：	心理学研究科	教授	鈴木　直人
副　査：	心理学研究科	教授	佐藤　豪
副　査：	心理学研究科	教授	畑　　敏道

要　　旨：

上記審査員3名は，2016年12月23日午後6時30分より約2時間にわたり，学位申請者に面接試問を行った。提出論文に対する質疑に対して，適切な応答と説明がなされ，本論文の学術的価値が実証された。さらに申請者は，感情心理学はもとより，精神生理学，心理学一般についての十分な知識を有することが認められ，引き続き行った語学試験（英語）についても十分な学力を確認することができた。

以上より，総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 悲しみの種類の違いに関する多角的検討
氏　　名： 白井　真理子

要　　旨：

人生の中で，われわれは必ず何かしらの喪失を経験する。そして，誰しもがその喪失を通して，悲しみを抱えながら生きている。だからこそ，悲しみは日常と隣り合わせにある感情といっても過言ではない。しかし一方で，悲しみという感情は，われわれが思うよりもずっと特殊 (Izard, 1991) で，不可解な感情 (Sterns, 1993) であるとも言われている。

これまでの感情心理学において，悲しみはネガティブな感情として一定の同意を得てきた。そして，悲しみの性質を他のネガティブ感情と比較することで明らかにしようと，主観的反応や付随する生理反応の側面から多くの研究が行われてきた (e.g. Scherer & Wallbott, 1994; Kreibig, Wilhelm, Roth, & Gross, 2007) 。悲しみ感情について扱ってきた研究を概観すると，喚起場面の多様性や，同じように悲しみと表現される事象であっても主観的感情の変化が異なること，悲しみに伴う生理的反応変化に関する知見の不一致など，様々な特徴が示されている。こうした悲しみの複雑な特徴や反応から，一つの悲しみの中に種類の異なる悲しみが存在する可能性が考えられる。

同一感情内に種類の異なる感情が存在することは，怒り (Frick, 1986) や妬み (Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2009) において報告されており，悲しみという感情にも怒りや妬みのように，種類の異なる悲しみが存在する可能性は十分に考えられる。つまり，同じ悲しみとして表現されてきた感情状態であっても，種類の異なる“悲しみ”であった可能性が考えられる。しかしながら，これまでの研究は，種類の異なる悲しみが存在する可能性を考慮せず，悲しみをいわゆるネガティブ感情の一つとして扱ってきた。そのため，悲しみという感情の本質の理解には未だ至っていないことが推察される。さらに，悲しみに種類の違いが存在するのならば，各々に適切なケアが存在するとも考えられ，種類の違いを検討することは，悲しみという感情そのもののさらなる理解にとどまらず，その社会的意義も大きいものと思われる。

本論文は，悲しみの種類の違いについて，主観的・生理的側面から多角的に検討した 3 つの研究からなる。

研究 1 では，悲しみの種類の違いを検討するための基礎研究として，悲しみを喚起する場面を明らかにすることを目的とした。大学生を対象に，Russell (1983) の分類法を用いて，予備調査で収集した 36 個の悲しみ喚起場面を分類する課題を行わせた。

多次元尺度構成法による分析の結果，ストレス値及び解釈可能性から 2 次元解を採用した。また，クラスター分析を行った結果，6 クラスターを抽出した。このことから，悲しみを喚起する場面は，“死別・喪失”(以下死別)，“恋愛における別離”(以下恋愛)，“孤独・一人ぼっち”(以下孤独)，“家族の不和”(以下家族)，“自己目標達成の失敗”(以下失敗)，“自己の怪我・病気”(以下怪我) の 6 つに分類されることが明らかになった。また，場面間の配置の関係性から，悲しみ喚起場面の特徴は，“対自己―対他者”と“対処可能―対処不可能”の 2 次元で概ね説明できることが示された。悲しみ喚起場面が 6 つに分類されることから，今までは“悲しみ”として一つに包括されてきた悲しみは，何らかの違った性質を持つものである可能性が考えられる。

研究 2 では，研究 1 において示された 6 種類の悲しみ喚起場面をもとに，主観的側面から，悲しみの種類の違いについて明らかにすることを目的とした。悲しみの種類の違いを測定できる尺度が存在しないため，まず，悲しみを表現する言葉から悲しみの特徴を評定する尺度を作成する

こととした。予備調査により集めた悲しみ表現語 31 語を用いて，研究 1 において示された 6 種類の悲しみ喚起場面のうち 1 つの場面をイメージするように求め，イメージした際に喚起される悲しみ感情は，質問紙によってどの程度表現できるのかを 7 件法により参加者に回答を求めた。探索的因子分析を行った結果，3 因子構造を採用した。第 1 因子は，“目が潤む”や“涙ぐむ”といった“涙”因子，第 2 因子は，“胸が引き裂かれる”，“胸が痛い”といった“胸の痛み”因子，第 3 因子は，“やりきれない”，“やるせない”といった“無力感”因子とした。

作成した悲しみ評定尺度を用いて，6 種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴が異なるのかどうか，時間的経過を考慮し検討を行った。大学生を対象に，6 種類の悲しみ喚起場面のうち 1 つの場面をイメージするように求め，その時の悲しみの特徴について評定するように求めた。また，時間的変化を考慮するため，悲しみ場面が生じた時 (以下生起時とする)，1 週間後，1 ヵ月後，半年後の 4 度の異なる時期でのイメージおよび評定を求めた。その結果，涙・胸の痛み・無力感のすべての評定値が生起時に高く，1 週間後における評定値と生起時の値に有意な差が認められず，その後時間的経過に伴って値が減少していく変化と，生起時における 3 つの評定値は前述した悲しみとほぼ同じ特徴を示すものの，時間的経過とともにその値が減少する変化という，異なる評定値変化が示された。前者は，死別・怪我・孤独場面によって喚起された悲しみにおいて認められた。後者は，失敗・恋愛・家族場面において示された。また，死別による悲しみは，時間経過後の涙と無力感の値が他の場面よりも高い値を維持するという顕著な特徴を示し，失敗による悲しみは，生起時に無力感の値が孤独および家族による悲しみより高かったことから，相対的に無力感が高いという特徴がそれぞれ示された。ゆえに本研究において，同じ悲しみという感情で表現される状態であっても，主観的側面においては，死別や怪我，孤独により喚起される悲しみと，目標や恋愛，家族により喚起される悲しみは種類の異なるものであると考えられる。

研究 3 では，生理的側面から悲しみの種類の違いについて検討した。研究 2 によって示されたように，主観的側面において悲しみの種類の違いが存在するのならば，その悲しみに付随する生理反応もまた異なる可能性が考えられる。本研究では，主観的側面において顕著な特徴の違いを示した“死別”場面と“失敗”場面による悲しみに付随する生理反応を検討した。大学生を対象とし，死別条件，失敗条件，中性条件の 3 条件のうち 1 条件に無作為に割り当て，それぞれの条件の場面をイメージする課題を行わせた。イメージ課題は 3 段階構成になっており，3 段階目に悲しみを喚起するように作成された。課題中， HR，収縮期血圧 (systolic blood pressure)，拡張期血圧 (diastolic blood pressure, 以下 DBP)，SCL，Heart rate variability の high frequency 成分 (以下 HF) を連続測定した。また主観反応に関して，イメージ課題中の主観的感情体験として 6 感情 (悲しみ，恐れ，怒り，嫌悪，不安，喜び) についての評定，研究 2 で作成した悲しみ評定尺度への回答を求めた。

結果，生理反応変化に関して，イメージ課題を行うことにより，3 条件とも課題前半は SCL の上昇，後半は HF の上昇が示された。また，イメージ課題中の DBP の上昇が，“死別”場面によって喚起された悲しみにおいてのみ示された。主観反応変化に関して，死別および失敗条件における悲しみ評定値には有意な違いは認められなかった。一方で失敗条件においては，嫌悪の評定値が死別条件よりも高く，怒りの評定値が中性よりも高いという結果が示された。さらに，悲しみの特徴に関しては，死別条件では失敗条件よりも涙評定値が高かった。

これらの結果から，死別場面により喚起される悲しみは高い“涙”評定値に特徴づけられる悲しみであり，DBP の上昇を惹き起こすと考えられる。一方で，失敗場面により喚起される悲しみは，死別の悲しみと比較すると嫌悪と怒りを含む悲しみであると考えられる。また，失敗時の悲しみには死別時の悲しみに認められたような生理反応変化は示されなかったため，これら 2 種類の場面により喚起された悲しみに付随する生理反応は異なると推察される。ゆえに，生理反応の側面においても，悲しみに種類の違いが存在する可能性が示された。

一連の研究結果より，悲しみという感情の中にも，少なくとも 2 種類の異なる悲しみの存在が

示唆された。一つは，死別といった“存在するものを失う”悲しみである。この悲しみは，主観的側面において悲しみの特徴が持続したのちに時間的経過とともに減少する反応変化を示し，中でも死別時の悲しみは涙評定値が高いという特徴を示した。生理的側面においては DBP の上昇という覚醒度の亢進を表す反応が示された。もう一つは，失敗といった“手に入らない”悲しみである。この悲しみは，時間経過とともに悲しみの特徴が減少する反応変化を示した。また，失敗時の悲しみには嫌悪や怒りが含まれるという特徴が示された。生理的側面においては，“存在するものを失う”悲しみとは対照的に，変化が認められなかった。このように，悲しみの種類の違いに関して主観的側面および生理的側面から多角的に検討した結果，各側面において反応の違いが示された。ゆえに，従来一つの感情として捉えられてきた悲しみには，少なくとも 2 種類の異なる悲しみが存在すると考えられる。